

現場の諸状況と切り結ぶ教養科目「キリスト教学」の多角的・横断的展開

一般教育学科 新免貢

従来の教学的な「キリスト教学」は、学生の関心や多様な現実から著しく乖離している面が否めない。一方、教学的知識による囲い込み教育から課題共有型教育への転換と現場重視をキリスト教教育に取り入れる必要性が高まっている。そこで、われわれは、本研究費を有効活用して、カルト体験者、カムアウトしたゲイ、ひきこもり、台湾高地民族出身者を特別講師として招き、現場と教場とを結ぶ斬新な授業を展開することが学生に有益と考える。このようなキリスト教教育は、全国的に見て、ほかに例はあまりなく、独創的・画期的・生産的な試みといえる。これにより、知の集積だけでは得られない豊かな人間理解へと受講学生が視野を広げ、良識ある市民に求められる豊かな教養と健全なキリスト教理解を身につけることが期待される。

1. 課題名：台湾高地民族と日本の先住民族の現状と課題

報告者：ジェフェリー・メンセンディーク
(本学非常勤講師、仙台青年学生センター主事) / 新免貢 (前出)

実施科目：キリスト教学Ⅱ

実施日時：2010年11月12日(金) 第3校時

特別講師：ディヴァン・スクルマン師(台湾基督長老教会宣教師、ブヌン族出身者)

授業主題：台湾原住民と日本先住民の交流

対象学科：人間文化学科4年、心理行動学科4年

①背景・目的

世界中がネット空間でつながるようになった今日においてさえ、民族的・文化的多様性への相互理解の浸透は必ずしも十分でない。アイヌ先住民と台湾の高地民族の現状から、人類の将

来を支える共生の方法を構築する。

②実施内容

スクルマン師は、黒い布地に赤、黄、白、緑の刺繍がほどこされている手作りのブヌン族の民族衣装を身にまといながら、パワーポイントを駆使して、多種多様な部族によって構成される台湾高地民族の独自の文化を紹介した。民族衣装の様々な模様や色にはそれぞれなりの意味が込められている。学生たちは、日本社会に見られるファッションとは基本的に異なる色鮮やかな文様に魅入り、強い関心を示していた。

台湾は、複雑な歴史を持っている。特に、平地に住む中国系の人々とは異なる原住民は少数者であるが、最近では尊重されるべき存在として認められつつある。現在公認されている原住民部族は14にのぼるが、どの部族も独特の文化、言語、しきたり——「われわれはそのようにやってきた」という伝統——を持っている。各部族は挨拶の言葉も種々様々あり、学生たちには異文化に出会う良い機会となった。

スクルマン師は、台湾基督長老教会宣教師として日本に派遣され、5年前から北海道に在住している。彼女は、「あいうえお」から学び、努力の積み重ねにより日本語を習得した。一方、日本と台湾との架け橋となる働きとして、週1度、アイヌの子どもたちのための生活塾(帯広市「エテケカンパの会」主催)に関わるようになった。アイヌの子どもたちの家庭環境は複雑であり、学校教育を受けていない親もいる。子どもたちは学校などでいじめを受けたりもする。スクルマン師は、生活塾の子どもたちの側に寄り添って塾での勉強を支援し、彼ら・彼女たちが文化的・民族的な誇りを取り戻せるように有意義な活動を行っている。スクルマン師はこのよ

うに、自らアイヌと直接交流しながら、アイヌの歴史や文化や現状について学び続けてきた。その結果、スクルマン師はアイヌと自国の高地民族との連帯への思いを深め、両者の共通点も再発見させられるにいたった。たとえば、狩猟で獲得したものを他のアイヌと分け合おうとする十勝のコルポックル（「路上の人」という柔らかな小人族にまつわる伝説は、ブヌン族に助けられたことに恩義を感じて農作物を送り、信義に基づいた共存を実践する台湾小人族にまつわる伝説と類似している。両伝説には、弱者が生きていくための深い知恵が盛り込まれており、格差社会に生きる現代人にも示唆的である。

スクルマン師は昨年、日本キリスト教団北海教区内にある「アイヌ情報センター」の活動の一環として、台湾ツアーを計画し、これには上述の生活塾に学ぶアイヌの子どもたちが参加した。スクルマン師はこの子どもたちを自分の村に案内した。台湾の原住民の子どもたちとの交流を通して、アイヌの子どもたち自身が励まされ、アイヌとしての自尊心と誇りを高められる体験をした。アイヌの子どもたちはまるで遠い親戚にでも会うかのような感動を味わった。スクルマン師は、アイヌとブヌンの子どもたちの集合写真を見せながら「私はこの写真が好きです。みんな一緒になると誰がアイヌなのかかわからないでしょ」と述べて、共有・共生・共感・共存のあり方を学生たちに提示した。

このほか、アイヌの伝統文化の様子、「ムックリコンテスト」の模様、アイヌの権利回復を求めるデモ行進などの写真を見せながら、日本政府が2008年にやっとアイヌを日本の先住民として認めたことを説明した。

③結果及び考察：

スクルマン師は簡単な覚えやすい歌を紹介し、学生たちも快く歌った。歌の共有もまた、平和への思いを形成する上で効果的である。「衣装や歌が良かった」、「小さい国に14の原住民族がいることを知らなかった」、「アイヌの子ども達との交流が印象的だった」、「民族の誇りを感じた」、「平和とは、一つひとつの民族を大切に感じて認め合うこと、そして、共にこの場所で生きていることであるという言葉が素敵だと感じました」、「日本に来たときは、『あいうえお』から始めたそうだが、大変だったろうと思う」などのコメントから見てもわかるように、異文化の人と出会い、話を聞くことが学生たちにとって刺激的な体験となった。

スクルマン師は、「何もしなくとも、そこにいるだけで、私は大きな意味があると思う」という謙虚な姿勢で、アイヌの人々と連帯する活動を続けている。キリスト教学の授業の中でこのような「人と人との架け橋になろうとしている人の姿」に出会うことの意味は大きい。自分たちの人生を考え直す良い材料となるからだ。

④参考文献

更科源蔵編『アイヌ伝説集』、北書房、1971年。
ディヴァン・スクルマン「Divan のウタンガイ
『北海教区通信』（日本基督教団北海教区編、
2009年11月）、18頁。
チカップ美恵子『カムイの言霊——物語が織り
成すアイヌ文様——』、現代書簡、2010年。

2. 課題名：性的少数者の抑圧的状况に対する
理解

報告者：新免貢（前出）

実施科目：キリスト教学 I

実施日時：2010年6月25日（金）第2校時

特別講師：U氏（U事務所代表）

授業主題：セクシュアリティの多様性

対象学科：人間文化学科1年

① 背景・目的

異性愛社会のシステムの中では、同性愛者はいろいろな仕方で不可視的存在とされてしまっている。沈黙を守れば、「異性愛者」とみなされ、カムアウトすれば好奇の目で見られ、蔑視される。この二重の縛りに規定された差別的・抑圧的実態をカムアウトしたゲイの語りを通して学び、性的多様性を認識するために必要な市民的考え方の基礎を身につけることを目指す。

②実施内容

用語解説（「レズビアン」「ゲイ」「バイセクシュアル」「トランスジェンダー」「インターセックス」「アセクシュアル」など）から始まって、自らの生い立ち、カムアウトに至るまでの苦悩、カムアウト後も続く苦しみ、異性愛社会の縛りの強さなどを中心に、衝撃的な内容の授業を展開した。聾啞者の両親を持つU氏は、手話を第二言語とするゲイである。そのような彼の人生そのものがマイノリティに位置することを余儀なくさせており、状況次第では、氏はいつ殺されてもおかしくはない。日本のみならず、アメリカであれ、イスラーム圏においてであれ、状況は変わらない。

わが国では、同性愛指向が精神的疾患として扱われ、多くのゲイたちを社会的に苦しめてきた。しかし現在、同性愛指向は病気ではないとの認識が世界の趨勢であり、世界保健機構(WHO)もそのことを認めている。しかし、U氏は、自らの同性愛指向を精神病として扱われた痛ましい体験があり、その後ノイローゼに苦しみ、今もなお副作用の強い薬の服用を続けている。氏

によれば、年間3万人を超える自殺者の中にも、少なからず同性愛者が含まれている。U氏自身が自殺未遂の経験者でもある。

日本社会における同性愛者差別と偏見は、「府中青年の家裁判」においても露呈された。同性愛者たちの公共施設利用に異を唱えたのは、単なる異性愛者たちだけではなく、保守派キリスト教グループも含まれていた。前者は、入浴中に浴場をのぞき、会議室のドアをどンドンたたき、「こいつらホモなんだぜ。ホモの集団なんだぜ」「また、おかまがいた」などといった差別的・暴力的発言を弄し、嫌がらせ行為を繰り返した。後者は、関連する聖書箇所（「女と寝るように男と寝るものは、憎むべきことをしたので、必ず殺されなければならない」『レビ記』20章13節）を恣意的に選んで堂々と読み上げ、「同性愛者は誤った道を歩んでいる人たちです」と宣言し、同性愛者たちを人間扱いしなかった。同性愛者であることを理由に公共施設の利用を制限することの当否を求めて争われたこの裁判の一審（1994年）、二審（1997年）とも、ゲイ当事原告側の「動くゲイとレズビアンの会」が被告側の東京都に勝利し、異性愛社会の偏狭なセクシュアリティ理解を浮かび上がらせた。

伝統的キリスト教の同性愛嫌悪は、生物学的事実に関する無知と偏見によるものであるが、克服しがたいほど劣悪で根深いものがある。たとえば、ナチスドイツの手によって数多くのユダヤ人たちがガス室送りとなったが、ユダヤ人たちに次いで犠牲数が多かったのは同性愛者たちであった。彼らもまたガス室に送られ、あるいは、虐待されたのである。欧米社会の人々の意識形成に影響を与える聖書の訳表現にまで、心理学上の診断用語（「性倒錯」など）が入って

きたという事実もまた、看過できない。キリスト教側が引き合いに出す『創世記』1章27節(「神は人を男と女に造った」)の解釈は決して一様ではない。そこで言及されている「男」(ツァーカル)「女」(ニケバー)は、社会的性差としての「男」「女」ではなく、生物学的意味での「オス」「メス」に相当する語である。古来、そこから両性具有の含蓄を引き出すことさえ試みられてきた。神の前で自らのセクシュアリティを主張するのは罪であるとする同性愛嫌悪の解釈は、もはや現代に適合しないと思われる。

ついでながら、映画『ミルク』でも話題になった米国史上最大のゲイ人権活動家ハーヴェイ・ミルク(本名 Glimpy Milch) —「カストロストリートの市長」と称せられた—の同性愛社会の欺瞞を告発する下記の叫びは記憶に新しい。

私は、沈黙の共謀にうんざりしている。・・・聖書の言葉遣いや意味を捻じ曲げて自分たちのゆがんだ見解に適合させようとしている話など聞き飽きた。でも、もっとうんざりさせられるのは、この合衆国の宗教指導者たちの音なしの構えだ。彼らには、この国民が聖書の真意を好き勝手に扱っていることがわかっているのだ・・・。

③結果及び考察

これらのことから見えてくるのは、同性愛社会の暴力的構造とキリスト教側の偏狭な聖書理解である。学生たちからは、「世間が押し付けようとする様々なことに対するUさんの激しい反発、憤りといったものを話の所々から感じられた」、「きっと多くの人が、自分自身の気持ちを隠して苦しんでいると思う。少しでも早く、そのような人々が正直な心を持って生活していける環境ができれば良いと感じた」、「Uさんは『理

解しなくてもいいから、ただ傍にいてほしい』とおっしゃいました。傍にいて、人間の心の温かさを伝えることで、自分は自分でいいんだということに気づいてもらえると思います。自分で自分を否定することはあってはならないことです」、「ゲイの存在は考えただけでも嫌でした。しかし、Uさんの話を聞いて誰を好きになるのかはその人の自由だと思えるようになりました」などといったコメントが寄せられた。

これらのコメントは、セクシュアリティの多様性を学ぶ学生たちの人間理解を深める上で一定の貢献を果たしたことを示している。性的少数者の居場所が確保されている社会は同性愛者にとっても生きやすい社会であるという市民意識の形成は、大学の教養教育に課せられた公的役割の一部を構成すると考えられる。そのためには、本に書かれてある知識の展開だけではなく、抑圧された性的少数者のナマの証言に直接触れることがきわめて有効であることを今回の特別授業は証明したことにもなる。

④参考文献

風間孝「同性愛／異性愛、その関係性の再構築—府中青年の家裁判を事例に—」『家族へのまなざし：市民的共生の経済学3』(慶應義塾大学経済学部編)、弘文堂、2001年、123-145頁。

『判例時報』(1509号、80-96頁)。

ハインツ・ヘーガー著、伊藤明子訳『ピンク・トライアングルの男たち—ナチ強制収容所を生き残ったあるゲイの記録1939-1945』、[株]パンドラ発行、現代書館発売、1997年。

アメリカ精神医学会編『DSM-4-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル』、医学書院、2003年。

Randy Shilts, *The Mayor of Castro Street*, New York: St. Martin's Press, 2008.

3. 課題名：人間関係回復のプロセスとしての
戦術的カルト問題対策、ひきこも
りとの共感・共苦

報告者：竹迫之（本学非常勤講師／日本脱カル
ト協会理事）

実施科目：キリスト教学Ⅰ・Ⅱ

実施日時：2010年6月22日（火）放課後、同
23日（水）第2・3・4校時、11月
17日（金）第2・3・4校時

特別講師：カルト脱会者3名、反カルト活動家
1名、引きこもり実践者1名

授業主題：失われた人間関係の回復プロセス

対象学科：英文学科・音楽科・国際文化学科各
1年・4年、発達臨床学科・日本文学
科各4年

①背景・目的

精神の自由を破壊するカルト団体の危険性は
今もなお高いことを認識し、カルト的生き方か
らの脱却を人間関係回復のプロセスとして社会
的に位置づけることを目的とする。また、ひき
こもり体験者を通して見えてくる競争社会のゆ
がんだ構造を観察することをねらっている。

②実施内容

i) 当事者の証言

前期には「世界基督教統一神霊協会」（通称「統
一協会」）からの脱会者としてA氏、「Jesus
Morning Star」（通称「摂理」）からの脱会者と
してB氏の2名、後期には「ものみの塔冊子協
会」（通称「エホバの証人」）からの脱会者とし
てC氏を招聘し、各自がそれぞれの痛ましい体
験談を披露した。また、前・後期とも、カルト
による路上での偽装勧誘を阻止するなどの働き
を続けている反カルト活動家としてD氏を招聘

し、氏はカルト団体の活動の偽らざる実態を報
告した。

上記脱会者3氏は、それぞれ「入会」の経緯
と動機について語った。「カルト被害者は自発的
にその集団に入会した」との誤解が蔓延してい
るため、脱会者らは一般的には「なぜカルトに
入ってしまったのか」と問われがちであるが、
3氏それぞれの証言により「そのような団体で
あるとは知らないまま勧誘され、錯誤を誘導さ
れて入信に至ったのであり、予めそのような団
体であることを知っていたら決して関わること
はなかった」という被害実態が明らかにされた。
3氏はそれぞれどこにでもいるような平均的な
若者たちだったのであり、特に深い悩みや特殊
な宗教的関心を持っていたわけではない。また、
平均以上にマジメであるとか、特定の専門分野
にのみ秀でていたというわけでもない。ただ、
たまたま重大な自己決定の機会に偶然に勧誘を
受けたのであり、また誰もが持っている不安や
向上心を逆手に取られ、また偏向した情報や虚
偽による誘導に長期間に渡って晒されたために、
やがては人格的変容を来してカルトのメンバー
にさせられたのである。

これらの証言を実証するために田中氏は、偽
装勧誘手口の実態を写真や動画などで説明し、
受講していた学生たちからは、「予備知識のない
人に対して、都合のいい情報のみを与えながら
接近する手口は卑劣である」「そのような状況に
巻き込まれたら、自分も入ってしまうに違いな
い」などといった感想が多数寄せられた。また、
世間一般に流布されている「特殊な素養を備え
た人が巻き込まれる問題」という捉え方には何
の根拠もない、という実態に驚愕する学生も多
数見られた。

さらに、これらのカルト被害の証言者たちは、担当講師によるインタビュー形式で、被害者の社会復帰に伴う諸問題について語った。カルトに所属していた期間はそれぞれ異なる。2年の者が2名、13年の長期に及ぶ者が1名である。カルトによって変容させられた人格を通常の社会に適応できるまで整えるには、所属していた期間の長短に関わらず一様に長い時間を必要とするという認識において3氏は一致していた。より正確に言えば、3氏とも、現在に至るまで「未だ社会復帰の途上にある」という自覚を持っている点が印象的であった。確かに、長期間メンバーとして活動していた被害者ほど対人スキルや社会的成長可能性を大きく損なわれている。また、友人や家族などの人間関係が物理的に破壊され、資産の収奪が甚だしく社会生活が不可能になるなどの深刻な問題が残る。通称「マインドコントロール」と呼ばれるカルトの誘導テクニックによって、現実認識や倫理観のみならず、感情の傾向まで操作されることの非人間性が、学生には強烈な印象を与えた。

キリスト教もかつては「自分は何者であるか」を説明する枠組みとして機能した歴史がある。しかしながら、今日においてはむしろそうした前近代的枠組みを懐疑する手段としての宗教的知性の確立が求められていると言える。そうした要請に応じられる宗教というものが可能であるかどうかは未知数であるが、しかし「学」としてのキリスト教学の知見は、この要請に誠実に対峙する責任を負っている。

ii)引きこもり当事者のナマの証言

引きこもり歴15年の山口政隆氏(農村伝道神学校在籍)が、歌とフリートークを通じて、引きこもりの当事者としての自分を表現した。付

加価値を要求する社会システムに起因する広い意味での「生きにくさ」に対峙する生き方の基盤となりうるキリスト教理解を考える機会が提供された。

山口氏は15歳時に阪神淡路大震災(1995年)の被災者となり、以降一般的には「引きこもり」と呼ばれる状態に断続的に陥っている。日本キリスト教団関係学校である関西学院大学神学部を8年がかりで卒業した後、現在の農村伝道神学校に入学するも、学内に設置された寮の部屋から出られない時期を何度も経験している。「引きこもり」とは言え、その実態は決して「閉じこもったまま」ではなく、気分が上向いている時期にはインドやパレスチナなどを訪問するツアーに参加し、ロックやフォークを中心とする音楽を通じた表現活動を断続的に行うアーティストとしての顔も持っている。現状への苛立ちや将来への不安、過去に遭遇した「構造悪における加害者」としか言いようのない有様のキリスト者との出会いの不愉快さなどを経て、現在は主に部落差別解放の運動に携わっている。

氏は、決して斬新なキリスト教理解を持っているわけではなく、歌唱力にも卓越したものがあるとは言えない。今年30歳を迎えるに足らずには社会性に乏しく、また定収入もないため親の資産に依存した生活を送っている。要するに自他ともに認める「ダメ人間」である。しかしそうした立場にあるゆえにこそ、周縁化されている人々と出会い、痛みを分かち合う隣人となりうる経験を積み重ねている。その経験に基づき、現在進行形で「生きにくさ」を味わっている人々の心に直接届く独自の表現が可能になる「瞬間」がある。

学生からは、「自分にも引きこもり経験があり、

当時は自分に何が起きているのか理解できなかった。周囲の支えによってその状況からは脱出することができたが、中には励ましのつもりで更に痛めつけるようなメッセージを投げかける人が多くいたことを思い返している」などのコメントが寄せられた。

③結果及び考察

本課題は、精神の自由を強引かつ巧妙に奪うカルト団体の手法と、その背景にある社会における失われた人間関係について考え直すきっかけを学生に提供することができたと評価できる。そして一方、カルト団体とは違って、日常性をありのままに享受し表現する「ゆるやかな生き方」を、キリスト教が支援しようと示唆された学生が少なからずいたとも考えられる。

④参考文献：

S・ハッサン著、中村周而・山本ゆかり共訳『マインドコントロールからの救出—愛する人を取り戻すために』、教文館、2007年。

櫻井義秀・中西尋子共著『統一教会—日本宣教の戦略と韓日祝福』、北海道大学出版会、2010年。

山口政隆「ヒキコモリノススメ～How does it feel?～」(本人作成配布文書)

【概要】

知識による囲い込みから脱却して、諸課題—異民族共生、性的多様性の認識、カルト対策—を共有し、現場と切り結ぶ教養科目「キリスト教学」の多角的・横断的展開を試みる。

1. 台湾高地民族と日本の先住民族の現状と課題

報告者：ジェフェリー・メンセンディーク
(本学非常勤講師) / 新免貢 (本学教員)

①背景・目的

今なお差別されているアイヌ先住民と台湾高地民族の現状から、共生の方法を構築する。

②実施内容

ブヌン族 (台湾高地民族の一つ) のディヴァン・スクルマン師 (台湾基督長老教会宣教師) が自ら製作した色鮮やかな民族衣装を身にまとい、台湾原住民の高地各部族の固有の文化を紹介した。また、アイヌとブヌン族の子どもたちの集合写真を見せながら「みんな一緒になると誰がアイヌなのかわからないでしょ」と述べ、共生・共存のあり方を学生たちに具体的に提示した。

③結果及び考察

異文化との出会い自体が、刺激的な経験となる。「何もしなくとも、そこにいるだけで、私は大きな意味があると思う」(スクルマン師の言葉)。

2. 性的少数者の抑圧的状况に対する理解

報告者：新免貢 (前出)

①背景・目的

現代の異性愛社会の中で、同性愛者はいろいろな仕方で差別を受けている。その実態をカム

アウトしたゲイの語りを通して学び、性的多様性を理解することの大切さを学ぶ。

②実施内容

「レズビアン」「ゲイ」「バイセクシュアル」「トランスジェンダー」「インターセックス」「アセクシュアル」など、人間の性的多様性は生物学的事実であり、精神的疾患ではない。ゲイの特別講師が自らの生い立ち、カムアウトに至るまでの苦悩、カムアウト後も続く苦しみ、異性愛社会の縛りの強さ、自殺未遂などの衝撃的な体験を語った。日本社会における同性愛者差別と偏見は、「府中青年の家裁判」において露呈された。

③結果及び考察

性的少数者の居場所が確保されている社会は異性愛者にとっても生きやすい社会であるという健全な市民感覚を養うことができた。

2. 人間関係回復のプロセスとしての戦術的カルト問題対策、ひきこもりとの共感・共苦

報告者：竹迫之 (本学非常勤講師)

①背景・目的

複雑な世界を単純化するカルト的思考からの脱却を人間関係回復のプロセスとして社会的に位置づけることを目的とする。また、ひきこもりから競争社会がどう見えるかを観察する。

②実施内容

i) 当事者の証言

カルト団体脱会者の体験談は、マインドコントロールの欺瞞と危険性を認識させてくれた。

ii) 引きこもり当事者のナマの証言

引きこもることが今や自身の生きる形となっている当事者の歌とフリートークは、「生きにく

さ」を感じる学生たちに共感を与えた。

③結果及び考察

カルト団体入会とひきこもり指向は、社会における破れた人間関係回復のプロセスに貴重なヒントを与えている。周縁化され、「生きにくさ」を味わっている人々の心に直接届く表現言語の構築は、キリスト教学の重要課題である。